



NOBUYUKI NAKASHIMA

中島 信之さん(金田)

男も女も自立が必要。家庭内で夫婦の協力ができていれば、子どもの自立につながる。

結 婚して約20年。夫婦共働きで、家のことは当然のように家族で協力してやってきました。男と女は体の作りだけでなく、見えない部分の違いもあると思うので「男性にふさわしいこと」や「女性だからこそ」という面も当然ありますよね。そういう「向き・不向き」を互いに補い合っていければと思っています。うちは出勤時にごみを出すとか、そういった力仕事は自分の役割です。週のうち数回は、わたしが夕食の支度もしていますし、これが思ったより好評で、楽しみながらやっています。娘2人と息子1人がいますが、子どもに対して叱る時には男でも女でも平等に諭します。近ごろは、自分のことを自分でしたがらない、働きたがらないという子どもが増えていますよね。手本となるべき親が夫や妻のどちらかの一方に頼りっきりで、自立できていないと、説得力に欠けるように感じます。そのような観点からも、夫婦で協力している姿を普段から子どもたちに示していくことが大切なのではないかと思っています。

Profile ● なかしま のぶゆき ▶ 福智町子ども会育成連絡協議会の副会長。昨年度行われた町食進会主催の4回の男性料理教室に初参加。夫婦で互いに協力しながら3人の子どもの育てている。

秋元 克之さん(赤池)

KATSUYUKI AKIMOTO

男 女共同参画という言葉を知らなくても、意識しないままに、きちんと男女共同参画が実現している家庭があることに気がきました。結局は男女が互いに相手に喜ばれることを考え、「助け合いたい」という気持ちをどれだけ持てるかという話なのです。

家庭の中の「夫」は、「夫」というだけでなく、子どもがいれば「親」であり、家から一步外に出れば「社会の一員」でもあるなど、いろんな役割を持っています。これは女性も当然同じです。その中

で自分ができることを自分ができ範囲内で最大限協力すればいいのであって、それを放棄して相手に押しつけたり「相手がやるのが当然」だと決めつけることが、いけないのです。夫も妻も「親」として子育てをする、家庭なら家庭での「自分のすべきこと」をきちんとする。「男だから」とか「女だから」という権利を主張する前提に、わたしたちはまず自分自身の義務を果たす必要があるのではないのでしょうか。その積み重ねが、男女の助け合いの関係を生むのだと思います。

Profile ● あきもと かつゆき ▶ 平成19年度のあすばる助成事業「福智町男女共同参画地域づくり事業実行委員会」の会長。男女共同参画啓発のソバの花フェスタでのクイズなどを実施した。

権利を主張する前に、まず、自分のやるべきことをやる。良い関係は、そこから生まれる。



柴田 ムツ子さん(上野)

MUTSUKO SHIBATA

直 方市役所に勤務した38年間、わたしはそれまで「女には務まらない」と言われていた部署にたびたび配属されていたこともあり、振り返ってみると、女性問題に関連する事例も昔は多々あったのだと感じます。その中で「意識格差」というものを強く実感してきました。

住民も行政も誰もが条例を把握し、その上にある日本の法律や世界の条約、そしてその核となる「人権」を本当に理解していなければ「言葉だけの男女共同参画社会の推進」に陥りやすいのではないかと

と思います。人権意識の高まりから法ができ、条例ができたという過程を踏まえ、女性は男性を、男性は女性を尊重する意識を「男女」の基本的な人権の尊重として持っていなければならないと思います。その中でも、基本はやはり家庭内での意識です。夫婦のどちらか片方が意識を変えても意味がありません。意識改革はなかなか難しいですが、日ごろの生活の中で男女平等という人権の視野を少しずつ醸成しながら、長いスパンで互いに理解し合うことが大切だと思います。

Profile ● しばた むつこ ▶ 平成17年に直方市教育委員会教育部長に就任、「筑豊地区で初めての女性部長」として注目を浴びる。平成20年に退職し、現在は福智町教育委員会の委員を務めている。

長い視点で理解し合うことが大切。誰もが日常の中で当たり前前に、人権尊重という視点を持つてほしい。



行政と住民が協力して、その実現を目指す「男女共同参画社会」ではいったい、わたしたちには何ができるのでしょうか…

福智町に住む5人のかたに、それぞれの視点から日ごろの取り組みやその思いを語っていただきました。

一人ひとりが、それぞれの場面でいろんな役割を持って生きている。



Interview
人が考える
男女共同参画

SHIGEKO TAKAHASHI

高橋 成子さん(金田)



思いやる気持ちや相手への気配り：男でも女でも、そんな大切な部分が、人間関係には不可欠です。

現 在は盆踊りや山笠競演会などで地元で欠かせない「宝見公民館婦人部」ですが、区の婦人会は、平成5年に参加者の減少で一度解散したことがあるんです。しかし「地区の発展には女性の力が必要」と、その後、再度自分たちで立ち上げ、今の姿があります。

山笠競演会では、掻き手が地元に戻らずに済むように、会場へ夕食を運びます。豚汁は大鍋3つ、おにぎりはおよそ5百個。単純に「喜んでもらいたい」という気持ちでみんなが協力しています。

職場の人にお茶を出すのも同じ気持ちですね。わたし自身、自分で入れたお茶より、人が入れてくれたお茶のほうがおいしく飲めますし。「お茶くみは女性の仕事」という固定観念ではなく、お互いにそうやっておいしく飲めたらいいと思うので、わたしはそれを仕事とは思っていません。職場でももちろん男性もお茶を入れてくれます。性別は関係なく、ごく自然なその人の人間性ですよ。疲れている時にそっとお茶を出してくれる…そういう気配りがとてもうれしいんです。

Profile ● たかはし しげこ ▶ 現在33人で活動している「宝見公民館婦人部」の3代目部長で、地元からも頼られる存在。地域・職場・家庭の各場面において、それぞれのポジションで活躍している。

MATSUE KANAYAMA

金山 松榮さん(伊方)



女性は自分に自信を持って、まず、政策決定の場へ積極的に出て行ってほしいですね。

わ たしが一番最初に「おかしい」と感じたのは30年以上前のことでした。選挙の話をした時に「旦那さんに伝えておいて」と、わたしには選挙権が無いかに言われたんです。当時は何をしても男性の言いなりで、また女性もそれが当然だと思っている人が多いという、そういう世の中でした。

そんな社会風潮が少しずつ変わってきたのは、やはり女性が勉強して社会進出を果たしてきたからなんです。わたしは世界女性会議などにも参加し、女

性の社会進出の必要性を強く感じてきました。男と女がそれぞれ生きているこの世の中で、今の日本のように男性だけで政策を進めてもうまくいくはずがありません。男女が協力しながら、それぞれの持っている力を発揮できる社会を実現させるためには、女性も女性という立場に甘えず、もっと力をつけなければならないと思います。キャリアを積み、自分の考えを持ち、町の政策決定の場に積極的に参画できる女性が、福智町にも増えていくことを期待しています。

Profile ● かなやま まつえ ▶ 旧方城町教育長。当時から住民向けの講座など積極的な男女共同参画推進活動を行ってきた。今回の条例の策定委員会副委員長で「ゆいネットワークふくち」の代表。